『和泉式部日記』の一対幻想

――手習い文章段の場合――

安永美保

【要旨】『和泉式部日記』には「おなじ心」という表現が五例あり、そのうちの三例が有明の月の手習い文章段に集中して使用されている。「おなじ心」という表現に対して、言葉の指す意味を額面通り解釈するのは危険である。特に、日記文学などの作者と登場人物が同一の場合は読者へ一対幻想をみせるための仕掛けと考えなければならない。本稿では、当該章段の「おなじ心」を時間表現と照合しながら再検討を行った。

すると、従来、当該章段の形成過程と考えられていた順序とは異なる形成過程を見いだすに至った。本文冒頭の宮の心内文「人やあるらむ」は女の浮気を猜疑する内容であるにもかかわらず、当該章段は女と宮の心理的な一体感などを主題として読まれることが多い。これこそが、作者の仕掛けにはまっているのである。女の書いた「有明の月の手習い文」は「手習い」の性格と「文」の性格を併せ持つ。特に、「文」の部分には送り先である宮の心理を操作する意図があった。当該章段は女の弁解という隠された目的の上に、女と宮の心理的な一対幻想が成り立つと読むことができるのである。

【キーワード】和泉式部日記、おなじ心、一対幻想、手習い文

はじめに

『和泉式部日記』のいわゆる「有明の月の手習い文」を含む前後の章段については、多くの考察がすでに行われている。これらの先学の研究の中でも「おなじ心」というキーワードはこ

の章段を読むための重要な表現であり、しばしばとり上げられてきた。しかし、多くの研究では月や時に関わる表現から時間軸を追うことを主としており、積極的に「おなじ心」が利用されている意図を考察したものはないようである。[1] そこで本論では、「おなじ心」という表現は作者の一対幻想を多分に含む表現であるという前提の下、再検討を行った。

一、「手習い文」の形成過程をめぐって

次にあげたのは、本章で問題にする『和泉式部日記』の該当箇所である。今後の説明に必要不可欠のため、やや長くなるが私に①から⑯のブロックわけを施して引用[2]した。

① 九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、

（宮）「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかし。人やあるらむ」とおぼせど例の童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせたまふに、

② 女目をさまして、よろづ思ひつづけ臥したるほどなりけり。すべてこのごろは、折からにやもの心細く、つねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。

③ 「あやし、たれならむ」と思ひて、前なる人を起こして問はせむとすれど、とみにも起きず。からうじて起こしても、ここかしこのものにあたり騒ぐほどに、たたきやみぬ。

④ 「帰りぬるにやあらむ。いぎたなしとおぼされぬるにこそ、もの思はぬさまなれ。おなじ心にまだ寝ざりける人かな、たれならむ」

⑤ 「人もなかりけり。そら耳をこそ聞きおはさうじて、夜のほどろにまどはかさるる。騒がしの殿のおもとたちや」とて、また寝ぬ。

⑥ （⑥-1）女は寝で、やがて明かしつ。いみじう霧たる空をながめつつ、（⑥-2）明くなりぬれば、このあかつき起きのほどのことどもを、ものに書きつくるほどにぞ（⑥-3）例の御文ある。

⑦ A秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな

⑧ 「いでやげに、いかに口惜しきものにおぼしつらむ」と思ふよりも、「なほ折ふしは過ぐしたまはずかし。げにあはれなりつる空のけしきを見たまひける」と思ふに、をかしうて、この手習のやうに書きゐたるを、やがて引

き結びてたてまつる。御覧ずれば、

⑨ 風の音、木の葉の残りあるまじげに吹きたる、つねよりもものあはれにおぼゆ。ことごとしうかき曇るものから、ただ気色ばかり雨うち降るは、せむかたなくあはれにおぼえて、

B秋のうちは朽ちはてぬべしことわりの時雨にたれが袖はからまし

嘆かしと思へど知る人もなし。

⑩ 草の色さへ見しにもあらずなりゆけば、しぐれむほどの久しさもまだきにおぼゆる風に、心苦しげにうちなびきたるには、C[3]ただ今も消えぬべき露のわが身ぞあやふく草葉につけてかなしきままに、奥へも入らでやがて端に臥したれば、つゆ寝らるべくもあらず。人はみなうちとけ寝たるに、そのことと思ひわくべきにあらねば、つくづくと目をのみさまして、なごりなう恨めしう思ひ臥したるほどに、雁のはつかにうち鳴きたる人はかくしもや思はざるらむ、いみじうたへがたき心地して、

Dまどろまであはれ幾夜になりむらむただ雁がねを聞くわざにして

⑪ とのみして明かさむよりはとて、妻戸を押し開けたれば、大空に西へかたぶきたる月のかげ、遠くすみわたりて見ゆるに、霧りたる空のけしき、鐘の声、鳥の音ひとつにひびきあひて、さらに、過ぎにし方、今、行末のことども、かかる折はあらじと、袖のしづくさへあはれにめづらかなり。

⑫ Eわれならぬ人もさぞ見む長月の有明の月にしかじあはれは

ただ今、この門をうちたたかする人あらむ、いかにおぼえなむ。いでや、たれかかくて明かす人あらむ。

Fよそにてもおなじ心に有明の月を見るやとたれに問はまし

⑬ (⑬-1)宮わたりにや聞こえましと思ふに、(⑬-2)たてまつりたれば、

⑭ うち見たまひて、かひなくはおぼされねど、ながめたらむにふとやらむとおぼして、つかはす。

⑮ 女、ながめ出だしてゐたるにもて来たれば、あへなき心地して引き開けたれば、

⑯ G秋のうちは朽ちけるものを人もさはわが袖とのみ思

ひけるかな

H消えぬべき露のいのちと思はずは久しき菊にかかりやはせぬ

Iまどろまで雲居の雁の音を聞くは心づからのわざにぞありける

Jわれならぬ人も有明の空をのみおなじ心にながめけるかな

Kよそにても君ばかりこそ月みめと思ひて行きし今朝ぞくやしき

まず、この①から⑯のブロックを時間軸にそって整理してみる。大橋清秀氏[4]は、この章段をAからGのブロックに分類し、本文中の矛盾点から形成過程を説明しておられる。私の考える形成過程とは異なるが、同意する箇所も多いので引用させていただく。ただし説明の都合上、大橋氏のA～Gの分類表記を私の①～⑯の分類表記に置きかえた。[5]

大橋氏の御論では式部の手習いの文⑫中にみえる「ただ今」という語に注目し、この「ただ今」が指すのは①の「有明の月に御目さまして」とある時点と推定している。そして、④の「おなじ心にまだ寝ざりける人かな、たれならむ」と、⑫中のF歌「よそにてもおなじ心に有明の月を見るやとたれに問はまし」と、⑯中のJ歌「われならぬ人も有明の空をのみおなじ心にながめけるかな」は、「おなじ心」という表現によって重なっており、作者は「有明の月」を見て宮と女が同様のことを考えていたことの喜びを記したかったのではないかと指摘されている。

また、大橋氏はこの三つの「おなじ心」の一致を根拠に、手習い文の⑨⑩⑪の文脈[6]は、②の「女目をさまして、よろづ思ひつづけ臥したるほどなりけり。」の前後に見聞きしたものであると述べておられる。さらに、この⑨⑩⑪の文脈は、②の「すべてこのごろは、折からにやもの心細く、つねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。」にみえる「このごろ」の物思いを記したという解釈をなさっている。このように、女の手習い文の前半⑨⑩⑪は②の「このごろ」の物思いであり、⑥の「あかつき起き」の明けてから書かれたことではないと考えると、手習い文の前後の表現の矛盾[7]を解決することができると指摘しておられる。

ここまで紹介した大橋氏の形成過程を、①～⑯の分類記号で並べてみると次のようになる。ただし、（　）内は手習い文である。大橋氏は⑬-1は「宮わたりにや聞こえましと思ふに」

までを手習い文の本文とされているためこちらに分類した。

②（⑨⑩⑪）→①③④⑤（⑫⑬-1）→⑥⑦⑧⑬-2→⑭⑮⑯

この大橋氏の形成過程は、「おなじ心」や「霧たる空」[8]といった表現の重なりを指摘しておられる点、非常に興味深い。しかし、ご自身も問題[9]になさっているように、⑪を②の時間帯にあったこととするのはいささか無理がある。⑪の「大空に西へかたぶきたる月のかげ」「鐘の声」「鳥の音」という表現は、夜中というよりはむしろ暁の情景と考える方が適当であろう。

すると、やはり新しい形成過程が別にあるのではないか。ここで、問題にしている①から⑯のブロックは、たった一晩におきた出来事の記述である。この①～⑯の形成過程を検証するには、より詳細に時間の推移を考察する必要がある。新しい形成過程の立証には自然描写や心情表現だけでなく、時間表現に着目することが不可欠である。

二、時間表現から考える形成過程

平安時代の時間表現語彙については、すでに小林賢章氏[10]によって、明らかにされていることが多い。そこで、本稿でも、小林氏の提唱する時間表現語彙の定義を下に、当該章段の時間表現を再検討する。ただし、小林氏ご自身は本稿で問題にしている宮のA歌について、次のように説明を加えておられる。

右の歌（当該章段のA歌を示す。）の成立事情は、『和泉式部日記』諸本のうち「三条西家本」では、「九月十日あまり」が「九月二十日あまり」となり、『和泉式部集』でも、「九月二十日」となっており、日付に異同があることがわかる。しかし、『和泉式部日記』諸本のうち、「三条西家本」は後出本であること、勅撰集である『新古今和歌集』に「九月十日あまり」とあることを考えると、当該話柄の日付としては、「九月十日あまり」の本文が正しかろうと予想される。

小林氏は本文に異同が生じたとお考えになっており、当該章段の日付を「二十日あまり」ではなく、「十日あまり」に特定しておられる。その根拠として、本文の解釈の観点からしても、A歌の歌意からは宮の帰宅時刻と月が西の山に入る時刻は接近している必要性があり、そこから、日付を特定すると十二日か十三日が妥当であることを指摘しておられる。つまり、小林氏はA歌の「有明の月」は、従来の「有明の月」が持つ常識[11]から逸脱した例であり、「十日あまり」の「日の出前」に西の山に

沈むことを前提とした稀有な例と考えておられる。

小林氏の日付を「十日あまり」とする説が、当該章段を読み解く視点の一つであることは大いに賛同できる。しかしながら、当該章段は未遂に終わったにせよ男女の逢瀬、つまり、恋情が主題になっている。こういった状況のなかで、敢えて、「十日あまり」の有明の月を頻出させる必要があったのであろうか。後朝の別れには付き物の「日の出後も残る有明の月」の方が、日記の主題にはふさわしいと思えてならない。そこで、本稿では当該話の有明の月は「二十日あまり」の有明の月という立場をとり、その上で、小林氏の時間表現語彙の定義を引用させていただきながら、新たな視点を論ずることとする。

当該話①～⑯ブロックに用いられている、主な時間表現を次に抜き出した。

① 有明の月

⑥ やがて明かしつ／明くなりぬれば／あかつき起き

⑦ 有明の月

⑪ 明かさむよりはとて／大空に西へかたぶきたる月のかげ／鐘の声

⑫ 有明の月／たれかかくて明かす人あらむ／有明の月

⑯ 有明の空／今朝

まず、手習い文やその前後の本文のなかで多用されている「明かす」という表現について検証したい。「明かす」という表現は、すでに小林賢章氏[12]によって明らかになっていることが多い。小林氏によると、『源氏物語』や『枕草子』のなかで、「アク」「アカス」は「ほのぼの―」などのように副詞を伴う場合や、「―ゆく」などの補助動詞を伴う場合を除いて単独で使用される場合、視覚的に明るくなるのではなく「日付が変わる」意味で解説できるとされている。さらに、小林氏は別稿[13]で当時の日付変更時刻を午前三時としておられる。

では、この小林氏の御論を、『和泉式部日記』の「有明の月の手習い文」章段にあてはめてみると、どうなるだろうか。「明かす」は⑥⑪⑫に一例ずつ使用されており、合計三例ある。この三例はいずれも新全集などの現代語訳を見ると「夜を明かす」と説明されており、日付変更の意味については言及されていない。

一つ目の⑥は「女は寝で、やがて明かしつ。」とあり、「やがて―」と副詞を伴う形がとられ単独用法ではない。しかし、直後に「明くなりぬれば[14]」とあることから、この時点ではまだ暗

く、「夜を明かした」という意味よりも「午前三時を過ぎた＝翌日になった」と解釈する方がふさわしい。

二つ目の⑪は「とのみして明かさむよりはとて」とあり、単独で「明かす」が使用されていることから、⑪も日付変更時の付近の出来事と考えられる。さらに、この⑪の直後には「鐘の声」という記述があり、この鐘を午前三時の後夜の鐘[15]と考えると時間的にも一致する。また、この⑪は前述した⑥と「明かす」「霧たる空」などの表現の重複が見られ、同時間帯の出来事と考えられる。

三つ目の⑫は「ただ今、この門をうちたたかする人あらむ、いかにおぼえなむ。いでや、たれかかくて明かす人あらむ。」とあり、「ただ今」という表現から、冒頭①の宮が女の家の門を叩かせた時間と同時間帯の出来事の記述であるという考え方もある。しかし、ここでも「明かす」が用いられており、⑥⑪の一連の「明かす」の使用法からみても、日付が変わる午前三時付近の女の心情と考える方が妥当であろう。

⑫が⑪と連続した午前三時前後の女の心情と考えると、⑫の記述はあまりに、異質なものではないか。前述したように、⑫と①が同時間帯の出来事と考えるのは無理があるが、⑫の内容が①と重なることは否定できない。⑫の記述は文を書こうとした⑥の時点を⑪で書き終えた後の記述である。しかも、女が昨晩何者かが門を叩いた可能性を念頭においていたとすると、心象風景の上では⑨⑩⑪よりもさらに過去の①の時点にさかのぼっている。つまり、⑨⑩⑪と⑫の間には掲載順位と時間軸に齟齬が生じており、⑫の特異性がうかがえるのである。こういった点から、改めて⑪と⑫の間には女と宮の間に何らかの出来事があったのではないかと推察される。

次に、女がいう⑧「手習いのやうに書きゐたる」とはどういうことであるかを検証する。女が「手習い」を開始したのは⑥の時点である。では、その「手習い」の当初の目的は何だったのだろうか。⑥には「あかつき起きのほどのことどもを、ものに書きつくるほどに」とあり、手習いのように書き始めた文の内容は「あかつき起き」に女が見た情景を記すことが目的であったことがわかる。この「あかつき」とは小林氏[13]によると、午前三時以降から日の出までの時間帯を指す表現である。これをふまえると、女が言う「あかつき起き」とは手習い文に置き換えると、⑪のあたりの出来事であることがわかるが、「―起き」の形をとっていることを考える必要があるだろう。

女の「手習い」の前半部には⑩「奥へもいらでやがて端に臥したれば」とか「なごりなう恨めしう思ひ臥したるほどに」といった「臥す」という表現が多用されている。ここでいう「臥す」とは直後に「つゆ寝られるべくもあらず」とあることから、単に横になるだけで、眠るという意味ではない。①で宮が訪ねてから⑪の午前三時より前の時間帯に、女は横になって過していたということがわかる。これは⑥の「あかつき起き」と深く関わる事実で、「あかつき起き」とは横になって物思いをしていた女が、午前三時付近になって、寝るのをあきらめたことを言っているのではないか。そう考えると、女が「手習い」のように書き始めた文章の当初の主題は、寝ることを断念して、偶然目に入った午前三時頃の自然の情景にあったのである。⑨⑩は混沌とした物思いをしながら「臥す」女の心情を反映しており、⑪の「あかつき起き」に至るまでになくてはならない描写なのである。

女の「手習い」の当初の目的が⑪の「あかつき起き」の情景描写にあったとすると、手習い文の残りの⑫はどのような役目があったのであろうか。そもそも、⑫の心象風景は①と重なり、「あかつき起き」の出来事ではない。「手習い」を開始した時点では、女は⑫を書く意志はなかったと推定される。「あかつき起き」という表現からも、⑫は異質なものであるということが言える。

これまで、女の「有明の月の手習い文」といわれる箇所は、少しのゆれはあるものの⑨⑩⑪⑫と考えられてきた。しかし、「明かす」「あかつき起き」といった表現を検証してみると、⑨⑩⑪は単に自然描写を手すさびに行った「手習い」と呼べるものであるが、⑫に関しては宮に読ませるはっきりとした意図に基づいた「文＝手紙」なのではないか。ここでいう女の意図とは何であろうか。少なくとも、文の送り先である宮に対して女の心理的な戦略が働いている可能性が高い。

三、一対幻想から考える形成過程

大橋氏の形成過程は、④⑫⑯の三つの「おなじ心」の重複に注目されている。「おなじ心」という表現がこの章段を読み解く重要な鍵語であることは大いに賛同できるが、「おなじ心」を辞書的な意味のみで考えることは危険である。小学館の『古語大辞典』において「おなじ心」は「同じような気持ち。同じ考え。」という説明がされている。このほかにも、和歌の詞書

では「おなじ心に（てよめる）」という形式で多用されており、自然の景物をみて「同様の情趣を解する」といった意味で解釈される場合が多い。

しかし、「おなじ心」はそれを使用する人や状況によって、前述したような表面的な意味を越えた解釈が必要になる。例えば、本稿で問題にしている女流日記文学の中で、恋人に対して「おなじ心」が用いられている場合、その「おなじ心」には筆者の願望が含まれている可能性が高い。読者は単純に筆者と恋人との間に同様の「おなじ心」があると解釈しがちであるが、実は読者が見ている「おなじ心」とは筆者の願望が作り出したもので、恋人側も実際に「おなじ心」であったかどうかまでは保証されていない。言うなれば、読者は筆者の一対幻想の世界を見せられているにすぎないのである。

「おなじ心」が一対幻想を作り出す表現であることをふまえて、『和泉式部日記』の「有明の月の手習い文」章段を再び整理してみたい。まず、三つの「おなじ心」の使用箇所をあげて見ると、④は女の心内文であり、⑫は女の歌、⑯は⑫に対する宮の返歌である。「おなじ心」の使用配置をみてみると、「おなじ心」はこの章段の冒頭付近である④に配置され、その後の二人の歌のやり取りの中でも詠み込まれている。結果、この章段において「おなじ心」には、すれちがいに見えた宮と女が、実は心的にはつながっていたかのように錯覚させる作用がある。

では、宮と女が「おなじ心」であるとはどういうことなのだろうか。そもそも、④の女が言う「おなじ心」が指すものは不明瞭である。少なくとも、④の時点で女は目覚めてはいるものの、月の見えない屋内[16]にいるのだから、「有明の月」の情趣を解するという意味ではない。すると、④の「おなじ心」が指すのは眠れない原因である物思いということになる。この物思いがどのような内容を指すのかは後の解釈に重要になるが、現在の情報から推測すると、行き違いになった来訪者に関連したことであったことはわかる。

一方で、⑫F歌と⑯J歌を比較しても「おなじ心」を先に使用したのは女であり、宮は女の歌に誘発されて「おなじ心」を詠み込んだにすぎない。このあたりの「おなじ心」の認識のずれは、女の⑫F歌と宮の⑯J歌に如実に表れている。F歌は「有明の月」を詠んでいるのに対し、J歌は「有明の空」になっている。もちろん、「有明の空」も月を含む表現と考えることもできるが、宮がJ歌であえて「月」ではなく「空」を詠

んだ原因は、男女が想像した月の違いにあるのではないだろうか。女の詠んだ月は宮が門を叩いた時刻に照っていた月であるが、宮の想像した月は太陽が昇った後も存在感を失いつつも空に残っている月だったのではないか。このように、歌の心象風景が異なることで、歌に詠み込んだ時間や出来事も異なることを露呈しているとすると、女と宮の「おなじ心」は必ずしも一致していないことになる。

そうすると、次に注目すべきは⑫のE歌である。⑫には「おなじ心」を含むF歌以外にも「われならぬ人もさぞ見む長月の有明の月にしかじあはれは」というE歌がある。このE歌は「有明の月」という言葉を、女がはじめてこの章段で使用した箇所である。この章段の冒頭は「九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして」であり、「有明の月」という言葉はなじみのある表現のように感じるが、実は冒頭の「有明の月」は宮の視点で見たものであり、女が「有明の月」という表現を使用するのは、手習い文も終盤にさしかかった⑫が最初なのである。この⑫E歌の「有明の月」は、宮が⑯J歌において女の「おなじ心」に誘発されたように、反対に女が宮の歌の一部を引用したと考えることはできないだろうか。従来は⑥に「例の御文ある」とあることから、⑦の宮のA歌は⑨⑩⑪⑫の手習い文を女が書き終えた後に届いたと解釈されてきた。しかし、宮のA歌で詠み込まれている「有明の月」を見た女が⑫のE歌F歌中に「有明の月」を意図的に入れて詠んだと考える方が自然ではあるまいか。

宮の⑦A歌を女が見たタイミングを⑫の前に置くと、次のような形成過程が考えられる。（　）内は手習い文であり、ここでは手習い文の記述を指す時期ではなく、手習い文を書いた時期と解釈する。

②→①③→④⑤→6-1　6-2　（⑨⑩⑪）→6-3⑦⑧
（⑫）⑬→⑭⑮⑯

右のような形成過程をたどったと考えると、二章でも述べたことだが、手習い文前半の⑨⑩⑪と⑫の間の女の心情に明らかな変化が見て取れる。⑨⑩⑪の中にあるBCD歌は独りの孤独を嘆く傾向が強いのに対し、⑫のEF歌は「有明の月」を介して宮との一体感を前提として歌を詠んでいる。つまり、手習い文の⑨⑩⑪を書く段階では昨夜の来訪者の正体は不明であったが、⑫を書く段階では来訪者が宮であることを女は知っていたのだ。女は宮からの⑦A歌によって、昨夜の出来事の全体像を

把握したうえで、願望によって脚色された宮との一対幻想を構築するために、①②③④のような説明を施し、全体のつじつまをあわせたのである。

ここまで、一応は女の一対幻想をふまえた形成過程を提示することはできた。しかし、「女が④の時点で何を物思いしていたのか。」「女が⑫を書き足すことにした意図は何なのか。」といった解釈上の疑問は解決するにいたっていない。

⑫を書き足すに至った要因は宮からのA歌が送られてきたことによるのは、すでに説明しているが、問題はこのA歌を女がどのように解釈したかである。A歌は「二十日あまり」の月と考えると、月の入りが昼前で、そのような時間まで宮が門前にいるのは不自然である。では、女はこのA歌をどうように解釈したのであろうか。「有明の月」が恋人との後朝の別れを象徴するものであることは常識として承知していたはずである。すると、その「有明の月」を待てないで宮が帰ったということは、すなわち、宮は自分（女）のところに他の男が訪ねていると疑った歌なのではないか。もしそうなら、有明の月の手習い文を宮に送るということは、自らの身の潔白を証明することにもなる。つまり、有明の月の手習い文は当初の目的は「手習い」（⑨⑩⑪部がそれにあたる）であり、⑫は宮への弁解の意図を含む「文」といえよう。女が宮に浮気を疑われていると考えたことは、①の宮の心内文に「人やあるらむ＝誰か男がきているのだろうか」という記述からも判断できる。この記述は宮の心内文という体裁をとっているが、実際は女の心中を反映しているものである。実際に宮が浮気を疑ったかどうかはここでは問題ではなく、女が宮の心をどのように推察していたかが重要である。何気なく読み飛ばされてきた①の記述は実はこの章段を読み解く重要な記述だったのである。

女の技量が優れていると言えるのは、単なる弁解の文に留まっていないところである。女は⑫を加筆することによって、宮と「有明の月」を共有し、自分（女）と宮の心は偶然にも一致していたかのように装うことに成功している。この女の戦略は、まず宮に対して効を発しており、宮はJ歌の中で「おなじ心」を詠み込んでいる。女は宮の心に同調することによって、宮も自分と同じ心になるように仕向けているのである。さらに、読者に対しても女は自分と宮が心理的に一対であるかのようにみせることにも成功している。④の時点での女の物思いは「すれ違いの来訪者の正体が宮だったのではないか」「宮がすぐに

ひきかえしてしまったのは自分への猜疑心からではないか」というような心配が心を支配してのことであった。にもかかわらず、女は自らの物思いの種には深く言及することなく、自らが起きているのは月への情趣を感じる心であるかのように装っている。読者は女と宮の心の一致は、女の方から宮に同調していることによるものだということには全く気付くことなく、女が構築した女と宮の一対幻想を見せられているのである。

結び

以上、『和泉式部日記』中の「有明の月の手習い文」章段を「おなじ心」という表現の特質に基づいて、その形成過程の検証を行った。この章段において、「おなじ心」とは単に心理的な一体感を喜ぶ意図で用いられているのではなく、女が宮との一体感を構築するために用いている仕掛けであるということがわかった。また、この章段を女の一対幻想がつくりだしたものと考えると、その形成過程の矛盾を解決することができる。

当たり前のことであるが、日記文学のなかでは作者が登場人物になり得る。これは、現実世界の出来事を文章化する作業、いわば三次元から二次元への変換を自分自身が行うということであり、作者側の願望が反映されやすい。特に、他者との心理的な一体感はその判断を本人にゆだねられている。「おなじ心」とはまさにそういった一対幻想をつくりだす象徴的な表現であり、この「有明の月の手習い文」章段は「おなじ心」を基調として、和泉式部の一対幻想が生み出した半物語的章段と読むことができる。

注

(1) 石坂妙子氏「『和泉式部日記』反転する世界――「おなじ心」と「心づきなし」と――」『平安日記文学の研究』（和泉書院）一九九四年一〇月では、宮と女の関わりの極致を表す言葉として「おなじ心」をとらえておられる。

(2) 本文の引用はすべて『新編日本古典文学全集26和泉式部日記』（小学館）によった。必要な箇所には傍線等を付した。なお、新編全集は三条西家本を底本としているが、本稿で扱った「おなじ心」の3つの用例は応永本並びに寛元本でも確認することができる。さらに、応永本では手枕の袖章段において、他の諸本にはない「おなじ心」を確認した。「おなじ心」は手習い文章段以外の章段を読み解く鍵語である可能性も浮上しており、今後の課題としたい。

(3) この箇所は地の文と和歌一首の混入脱落現象があったとされ

ている。後の宮からの返歌五首との関係からも、「消えぬべき露のわが身は物のみぞあやふ草葉につけて悲しき」を女の二首目の歌と考える。

（4）大橋清秀氏・大橋京子氏『和泉式部日記の心性と日記』（世界思想社）二〇〇八年三月の第二部四節「和泉式部日記の表現の矛盾からその形成過程を推定する」をさす。

（5）A→①②③④⑤⑥⑦⑧／B→⑨／CとD→⑩／E→⑪／F→⑫⑬／G→⑭⑮⑯。ただし、⑬の「奉りたれば」はGに分類されている。また、宮の返歌五首については掲載されている順番にBCDEにそれぞれ「・」で表記しておられるが、本稿では和泉式部の歌を含めて順番にアルファベットで通し番号をつけた。

（6）大橋氏はこの⑨⑩⑪は「風」「雨」「草」「草葉」「露」「雁」「雁がね」「鳥の音」「鐘の声」などの語が用いられており、これらの語は宮の返歌五首に「袖」「露」「菊」「雁のね」がみられるだけで特異的な文脈であるという指摘をなさっている。

（7）鈴木一雄氏『全講和泉式部日記　増補版』（至文堂）一九七七年五月の考説（二二）「手習いのやうに書いた長文の感想文内の歌と、宮の返歌との不一致について」の中で歌文と消息文などに本文重複の矛盾を指摘しておられる。

（8）この他に、大橋氏の分類は⑥にある「女は寝で、やがて明かしつ。いみじう霧たる空をながめつつ」と⑪の「霧たる空のけしき」が同じ時点のことであるという指摘もされている。

（9）この問題について大橋氏は「それにしても⑫のこの二首の有明の月の歌の前に⑪の「霧たる空のけしき、かねのこゑ・鳥のね一つにひゞきあひて、」があって、暁を知らせる鐘や鶏鳴の後に、女がこの有明の月の歌を詠んだことになり、それから後に人が門をたたいたことになって、そぐわぬ感じを拭いさることができないのである。あるいはこのことに齟齬を感じぬとされる向きもあるかもしれないが、もしかするとこの⑪⑫の部分の順序が逆になっているのではないかとさえ思われるほどなのである。」と述べておられる。

（10）小林賢章氏『アカツキの研究　平安人の時間』（和泉書院）二〇〇三年二月。第五章「アリアケ考」で『和泉式部日記』の有明の月の手習い文章段を考察している。拙稿では当該章段の日付を「二十日あまり」とする説をとるが、「有明の月」が「十日あまり」の月や「明け方以外の月」を指すこともあるという小林氏の説を否定するものではない。

（11）「有明の月」については『小学館古語大辞典』（一九八三年一二月・小学館）では次のような説明がされている。「①月が空にありながら、夜明けになること。また、そのころ。②（有明の月の略）夜があけても、なお空に残っている月。十六日よりしばらく後の月は西方の空に残り、月末近くの月は東方にかかっている。」このように、「有明の月」とは従来は

太陽が昇ってもなお、空に残っている月を指すことが多く、しばしば物語中では後朝の別れと同時に描かれることが多い。

(12) (10) の第三章「アク考」

(13) (10) の第一章「日付変更時点とアカツキ」

(14) 「明くなりぬる」については、太陽が昇って明るくなるという意味のほかに、「あけぼの」や「あさぼらけ」の可能性もある。「あけぼの」や「あさぼらけ」の場合であれば、日の出前と考えることもできる。さらに、太陽や月といった要因以外にも、天候によって明るくなったと考えることもできる。天候の場合であれば、直前の「霧たる空」の「霧」が晴れて月の光によって明るくなったと考えることもできる。しかし、⑥の場合はいずれの可能性にしても、「やがて明しつ」の解釈は「夜が明ける」よりも「日付がかわる」の方がふさわしく問題はない。

(15) 「後夜」については『小学館古語大辞典』(一九八三年一二月・小学館) では次のような説明がされている。「六時の一つ。夜を三分した最後の時間。現在のおよそ午前二時から午後六時ごろをさす。」しかし、これではあまりに長い時間で、時刻の特定はできない。小林氏はご著書 (9) の中で『枕草子』中の「後夜」について、午前三時頃と特定なさっている。したがって、本稿では午前三時付近になった鐘を後夜と鐘とした。また、本稿で問題にした⑪は月の光が同次元にあるものの、「鐘の音」「鳥の声」などの聴覚による描写の多い傾向がある。これは、辺りが暗いことを示しており、暗いうちの時間を指し、聴覚によって特定されやすい「暁」から、「暁の鐘」と考えることもできる。「後夜の鐘」と「暁の鐘」は同一のものであると考えることもできるが、本稿では特定はさける。

(16) 宮が女を訪ねた時間が暁以前 (夜半) であったとすると、宮が訪れた時間は見えていた月も、暁の頃には文⑨⑩にあるような気象条件の悪化により隠れていたと考える。その場合、天候の回復を待ち女が月を見るためには約三〜五時間もの間端近にいなくてはならず、不自然である。やはり、宮が訪ねた時、女は屋内にいたのであろう。さらに、宮の来訪時に女の側に寝ていた女房は暗闇で視界は悪く、物にあたったという記述もあり、月光も届かない屋内にいた証拠になるだろう。仮に、宮が女を訪ねた時間が午前三時に接近しており、女がこの④の時点ですでに端近の所に出てきていたとしても、月はみえなかった。なぜなら、手習い文の記述⑨には「ことごとしうかき曇る」「雨」「時雨」などがみられ、月が見えない状況だったことがわかる。そうなると、宮のA歌の「有明の月」は女の家で見た月ではなく、自邸で朝方見た月ということになり、やや飛躍した話になるが、冒頭①の「有明の月」はA歌を受けた女の創作という可能性さえ出てくるのだ。